HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	高校生の生活における分化の現状：性行動と性意識の分析を通じて
Author(s)	鈴木, 佳代
Citation	北海道大学大学院教育学研究科紀要, 90, 145-165
Issue Date	2003-06
DOI	https://doi.org/10.14943/b.edu.90.145
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/28910
Type	departmental bulletin paper
File Information	90_P145-165.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

北海道大学大学院教育学研究科
紀要 第90号 2003年6月

高校生の生活における分化の現状

――性行動と性意識の分析を通じて――

鈴木佳代*

The Differentiation of the Life among High School Students: Their Behavior and Attitude about Sex

Kayo SUZUKI

【要旨】本研究は，北海道内の高校生1,306名を対象に行ったアンケート調査および13名の高校生へのインタビュー調査の結果を用いて，現代の高校生の交際と性行動の実態について報告するとともに，友人グループが交際や性行動をめぐる意識や行動に与える影響について明らかにすることを試みるものである。調査の結果，ほとんどの回答者は高校生の性行動を容認しており，実際の行動においても異性との交際や性行動が日常的なものになっていた。しかし，交際や性行動の状況や意識は個人によって異なっており，そこには友人グループ内部の相互作用が大きな影響を与えていると考えられた。その中で，性に関する高校生の意識や行動が分化している原因として，若者の生活のありかたや将来展望を規定する社会構造の存在が示唆された。
【キーワード】高校生，性行動，友人，分化

はじめに

「性体験，高3女子の45.6%――教師ら調査　3年前より6.6ポイント増　東京」[1]「高3の経験率『4割』」[2]――これらは，2002年1月に東京都内の団体が行った，性に関する調査の結果を伝える新聞記事の見出しである。1987年に同団体が行った調査では，高校3年生の性経験率が，男子で27.7%，女子で18.5%だったことを考えれば，若者の性行動には15年間で劇的ともいえる変化が起こったことになる。性行動自体はきわめて個人的な領域に属することがらであるが，経済的自立を達成していない10代の若者のあいだで性行動が活発化しつつある現実は，われわれに様々な危惧を抱かせる。

しかし性行動の活発化は，あらゆる層の若者に一様に起こっているわけではない。筆者が行った調査（後述の調査Ⅰ）では，学力下位校の生徒において性経験率が高く，初交年齢が低いことが明らかになった[3]。また，日本性教育協会の調査結果を分析した渡辺（2001）は，生徒の性経験に関して学校集団に構造効果が認められることを明らかにし，学校集団内部における生徒間のパーソナルなコミュニケーションがこうした差を生み出しているのではないかと推察している[4]。

* 北海道大学大学院教育学研究科修士課程修了（教育臨床講座）

若者の性行動が早くから社会的な問題として認識されてきたアメリカでは，若者の性行動抑制のための様々なプログラムが作成・実施されており，友人からの影響力に対処することはそれらの中でも大きな柱となっている[5]。しかし，若者の性行動に関する研究の中心は家庭環境や親子関係の問題におかれており，友人関係についてはそれほど多くの研究がないため，その実態は明らかになっていないところが多い[6]。国内の研究について言えば，性経験率の推移が関心の中心となってきた感が強く，性行動の現状とそれに対する意識や背景にまで切り込んで分析されたものは少ない[6]。しかもそれらのほとんどは大規模なアンケートによる調査によるものであるために，数字による現状の把握にとどまり，性行動が若者の生活においてどのように組み込まれているのか，あるいは性行動の背後にある若者の意識や社会的要因がいかなるものなのかといった具体的な問題については不明な点が多いままとなっている。

そこで本研究では，北海道内の高校生1,306名を対象に行ったアンケート調査および13名の高校生へのインタビュー調査の結果を用いて，高校生の交際と性行動の現状を報告するとともに，友人グループが若者の交際や性行動をめぐる意識や行動に与える影響について明らかにし，その背景について考察する。ここでは特に，インタビュー調査から得られた高校生の言葉に耳を傾けることで，具体的な文脈に即して現代の若者の性行動や性意識の実態を描き出すことに比重をおく。インタビューを前面に打ち出した記述法は，個別の事例や意見に偏った見方に陥る危険性を免れえないが，高校生自身から発せられた言葉は彼（女）らの意識や価値観をより直接的に反映していると考え，あえてこのような方法を用いることとした。前半の2節では現代の高校生の交際や性行動の実態を示し，その特徴について描きだす。後半の2節では，前半で明らかになった全体像を友人グループという観点から再考し，友人が交際や性行動に与える影響について明らかにするとともに，その背景について分析する。

1．調査の概要

(1) アンケート調査（調査Ⅰ）

アンケート調査は，調査依頼をした北海道内の公立･私立高校15校のうち，実施の承諾を得られたA～D校の各高等学校に委託する形で，2002年8月から10月に行った。調査時に用紙の配布・説明・指示・回収を行った各学級担当の教職員には，事前に実施方法と注意事項を明記した文書を配布し，養護教諭を通じて説明を行っておいた。調査は集団自記法によって行い，担当教職員の判断により15～20分の回答時間を設けた。回答の精度を高めプライバシーを守るため，回答時間中は教職員の介入をなくし，回答者本人の手で用紙を封入してもらって学校単位で回収した。A校では3年生女子の一部クラスのみの実施であったことから，今回はB～D校の3校1,216票のうち，有効回答1,165票の結果を用いて考察を行った。なお，今回の調査

表1　調査対象校の特徴

	地域	学力レベル	校内 男女比(%)	男子B～D 校中比(%)	女子B～D 校中比(%)	有効回答率(%) 男子：女子	進路概況(%) (大学･短大:専門学校:就職:他)
A校	都市部	上位	－：100	－	－	－：100	DK
B校	都市部	やや上位～中位	46：64	46	71	98：98	40：34：10：16
C校	都市部	下位	82：18	43	14	92：99	20：17：46：17
D校	地方部	上位の一部を除く全体	49：51	11	15	97：100	30：31：39：0

のサンプルは偏りのない層から抽出されたものではなく，さらにその中でも規模の比較的大きなB校に偏っている（特に女子では7割がB校の生徒である）など，この調査結果が日本の若者の全体像を反映したものではないことをあらかじめ断っておく。

交際について見てみると，男子の57.7%，女子の69.7%には交際経験があり，そのうちこれまでに交際した相手の人数が1人だったものは男子で23.2%，女子で24.1%にとどまっていた。また，交際経験があるもののうち，男子の18.3%，女子の16.6%は6人以上の相手と交際したことがあると回答したことから，交際が生徒の中で一般化しているばかりでなく，複数の交際を経験することが当たり前になっており，比較的短期の交際が多いと考えられた。

性行動の面では，男子の32.4%，女子の37.9%に性交経験があった。性経験群は高学年ほど多く，現在交際中の相手がいる3年生では男子の83.3%，女子の86.6%に性経験があったことから，調査対象の高校生においても性行動が特殊なことでなくなっていることが認められた。

(2) インタビュー調査（調査II）

調査は2002年8月から10月にかけて実施した。調査の内容上，調査者（筆者）と面識がない者が対象者としてふさわしいと考えられたため，筆者の知人に協力者の紹介を依頼した。インフォーマントには紹介者からあらかじめ調査者を紹介しておいてもらい，調査当日に初めて対面した。場所は市街地の喫茶店等の場合と，下宿の空き部屋の場合とがあった。調査には半構造化面接法を用い，インフォーマントには答えにくい内容については答えなくてよいこと，プライバシーの保護に十分配慮することを伝え，許可を得てすべての会話を録音し，後日書き起こした。G・H・Iの男性3名についてはプライベートな経験や意見，とりわけ性に関わる部分について話しやすい状況を作るため，インタビューに男性調査者1名が加わった。また，A・B，L・Mはインフォーマントの希望により，それぞれ同時にインタビューを行った。調査は基本的に1回であったが，Aのみは後日，電話による35分間の補足調査を行った。

交際経験がある7名28ケースの交際のうち，約半数の交際は3ヶ月以内に終わっていた。交

表2　インフォーマントのプロフィール

インフォーマント	A	B	D	I	G	J	M	E	F	H	K	L	N
性別	女性	女性	女性	男性	男性	女性	女性	女性	女性	男性	女性	女性	女性
学年	高1	高1	高3	高2	高3	高2	高2	高1	高1	高2	高2	高2	高2
交際経験	○	○	○	○	○	○	○	×	×	×	×	×	×
性経験	○	○	○	○	×	×	×	×	×	×	×	×	×
学校の学力レベル	中	下	中	下	下	上	上	下	下	下	上	上	上
本人の校内学力	下	下	下	上	上	中	上	上	中	上	上	上	上
家庭学習	×	×	×	×	×	○	○	×	○	×	○	○	○
アルバイト経験	○	○	○	○	○	×	×	×	×	×	×	×	×
経済状況			△	△	△			△					
家族関係		△		×	△		△						
父親の職業	専門職	会社員	自営業	公務員	会社員	教員	専門職	農林漁業	その他	会社員	教員	公務員	会社員
調査場所	喫茶店	喫茶店	喫茶店	下宿	下宿	喫茶店	喫茶店	下宿	下宿	下宿	喫茶店	喫茶店	喫茶店
調査時間	120分		80分	110分	95分	105分	120分	70分	80分	85分	95分	120分	85分

「交際経験・性経験・アルバイト経験」○＝ある，×＝なし。「家庭学習」○＝している，×＝していない。
「経済状況・家族関係」△＝あまり良くない，×＝悪い（ライフヒストリー及び現在の状況をもとに判断）。

表3　交際経験および性経験の概要

	インフォーマント／性別／学年	交際相手	交際開始時の学年 本人／相手	交際の契機	告白の方法	交際期間	親の関知	身体接触	相手の性経験	性交の要求者	性交までの交際期間	初交の場所	初交時の避妊	日常的な性関係
交際経験あり	G／男／高3	①	高2／高2	路上ライブ	直接	2ヶ月	×	手をつなぐ						
		②	高3／高1	アルバイト	メール	1ヶ月＋	×	キス						
	J／女／高2	①	高1／高1	同級生	直接	2ヶ月	○	手をつなぐ						
		②	高2／高2	同学年のメール友達	メール	3ヶ月	×	キス						
	M／女／高2	①	中3／中3	同級生	DK	1ヶ月	○	手をつなぐ						
		②	高2／高2	同じ部活	直接	2ヶ月＋	○	なし						
交際経験・性経験あり	A／女／高1	①	中2／中2	遊び仲間	友人を介して	1年	×	なし						
		②	中3／中3	遊び仲間	直接／友人を介して	1ヶ月	×	ペッティング	あり	相手				
		③	中3／中3	遊び仲間	メール	4日	×	なし						
		④	中3／中3	遊び仲間	友人を介して	1ヶ月	×	なし						
		⑤	中3／中3	遊び仲間	メール	2日	×	なし						
		⑥	中3／中3	同学年のメール友達	メール	20日	×	セックス	DK	相手	10日間	友人の自室	膣外射精	なし（10日後に交際解消）
	B／女／高1	①	小5／小5	同級生	直接	不明	○	キス						
		②	中2／中2	同級生	友人を介して	1年3ヶ月	DK	キス						
		③	中2／中2	同級生	電話	5ヶ月	DK	なし						
		④	中3／中3	同級生	電話	数日	DK	なし						
		⑤	高1／高3	友人の彼氏の後輩	電話	2ヶ月＋	○	セックス	あり	相手	2ヶ月間	相手の自室	膣外射精	なし（インタビュー数日前に初交）
	D／女／高3	①	中1／中1	同級生	直接	1年2ヶ月	×	キス						
		②	中3／中3	同級生	直接	3～4ヶ月	○	キス						
		③	高1／高1	最初に交際した相手（①）	直接	1年10ヶ月	○	セックス	なし	相手	1年間	相手の自室	コンドーム	あり（「週1回くらい」）
		④	高3／大学生	—	DK	4ヶ月＋	○	セックス	あり	どちらとも	1週間	相手のアパート	コンドーム	あり（「会うたび」）。2～3週に1度外泊。
	I／男／高2	①	中2／中3	遊び仲間	直接	2～3ヶ月	○	セックス	あり	相手	2週間	ホテル	膣外射精	あり（「数え切れないくらい」）
		②	中2／中2	同級生	なし	4ヶ月	○	セックス	あり	自分	1週間	自分の自室	コンドーム	あり
		③	中3／高1	遊び仲間	なし	1ヶ月半	×	セックス	なし	自分	2週間	ホテル	コンドーム	DK
		④	中3／大学生	遊び仲間	直接	4ヶ月	○	セックス	あり	相手	3～4日間	相手の自室	なし	あり
		⑤	中3／中3	同級生	電話	1ヶ月	×	キス						
		⑥	高1／高1	同級生	直接	5ヶ月	○	セックス	なし	自分	3ヶ月	フェリーの個室	なし	DK
		⑦	高1／高1	同級生	直接	1ヶ月	×	DK（セックスなし）						

際相手の4分の3は同学年であり，中には同時期に重複している交際や，前の交際が終わった直後に始まった交際もあった。ほとんどのインフォーマントはを交際と友人関係との境界線を「告白」の有無においており，最短では2日間の「交際」というケースもあった。

交際経験はあるが性経験はない3名（G・J・M）についてみてみると，インタビュー時に進行中だったG，Mの交際を含め，交際はいずれもあまり長いものではなく，短いものでは1ヶ月程度，長いものでも3ヶ月であった。また，携帯電話やメールが重要な通信手段となった，あまり顔を合わせない形での交際が比較的多く見られた。G，Jにはキス経験があったが，性行為に関しては要求した経験／された経験のあるものはいなかった。

性経験がある4名（A・B・D・I）は，交際経験のみの3名とくらべてより多くの交際を経験しており，短期で交際が終わっているものと，比較的長期の交際が続いているものとがいた。また，AとIは，男女が入り混じった遊び仲間のグループに強いコミットメントを持っており，しばしばそのメンバーと交際していた。初交後10日間で交際関係が終わったA，インタビューの数日前に初交を経験したばかりのBを除く，DとIの2名は初交以降も性行動をとっていた。

2．性行動および性行動に対する意識の特徴

〔 〕内は筆者の発言。また，（ ）内は筆者による文脈の補足。

(1) 性行動の特徴

1）初交時の特徴（低年齢・短期間の交際・年上のパートナー・相手からの要求）

初交には，調査Ⅰ・Ⅱに共通して見られるいくつかの特徴があった。一点目は，低年齢での初交が多く見られることである。調査Ⅰの回答において，初交の最頻学年は高校1年(36.0%)であったが，性経験群男子の52.1%，性経験群女子の33.5%は高校入学前に初交を持っていたことから，性行動が高校生のみならず中学生の間でも広まっていることが示された。また，調査Ⅱにおいても，Aは中学3年のときに同級生である恋人から，Iは中学2年のときに交際相手の中学3年の女性から性行為を求められた経験を持っていた。

A：私がそのとき生理だったんですよ。それで，初めてじゃないですか。だから，いや，それは無理って言って。でも。
B：でも手前までしちゃったみたいな。
A：手前みたいな。そうですね。〔どこで？〕相手の部屋。そのときは嫌って言ったんですよ。で，そのときは「えー，いいじゃん。」みたいな感じだったんですけど，「ちょっとそれは無理」って言って。〔もしも生理じゃなかったら？〕拒否はしていたと思うけど，最終的には折れていたと思います。

二点目は，交際を開始してから初交に至るまでの期間が短いことである。調査Ⅰでは，性経験者の4割が交際開始から1ヶ月以内で初交に至っており，調査ⅡではAが10日間，Bが2ヶ月間，Dが1年間，Iが2週間とばらつきはあるものの，短期の交際で初交に至ったケースが見受けられた。

三点目は，初交の相手は同学年か年上であることが多く，特に初交年齢が低い場合や女子の場合には相手が年長のケースが比較的多いことである。調査Ⅰでは，中学生以下で初交を経験

した男子のうち，初交の相手が高校生だったケースが13.3%を占めており，同女子では相手の16.0%が高校生や社会人だった。高校生で初交を経験した男子では，相手の93.1%は高校生であり，相手が中学生以下だったのは3.4%のみだった。女子の場合は相手の89.2%が高校生，10.8%が大学生や社会人で，相手が中学生以下だったケースは見られなかった。調査IIにおいても，Bの初交相手は「別の高校に行ってる2つ年上の彼氏」であり，Iの場合は「地元の遊び仲間で，一個上の先輩」であった中学3年の女性であるなど，年上の相手との初交が見受けられた。

I：〔ホテルのお金，どっちが出したの？〕向こう。もちろん！　そんなん出さないよ。だって向こうから誘ったし。…（中略）…〔向こうから誘われたって言ったけど，相手は初めてじゃなかったってこと？〕うん。

四点目は，性経験のあるものが性経験のないものに初交を迫ったり誘導したりすることが多いことである。調査IIで性経験のあった4人の初交はすべて相手から要求されてのものであり，そのうち3人は相手が既に性経験を持っていた。したがって，カップル間の性経験の非対称性が，性経験のないものを初交へと導く要因になる可能性があると考えられる。

2）意思決定および意思疎通の問題

高校生や中学生の若者が性行動を求められた際には，それに対する主体的な意思決定ができない状態であったり，自分の意志を持っていてもそれをパートナーに伝えることができなかったりしたために「なりゆき」で性行動に至ることがしばしば起こっていた。

A：〔彼はなんて言って誘ってきたの？〕最初は，キスとかしてるじゃないですか。最初のうちはなりゆきで，（そ）して，言ってきた。最初は「エーッ」とか言ってて，「いやぁ…」とか言ってかわしてて，そのまま2，3時間して…折れた。話（がセックスの誘いから）変わって戻って変わって戻ってみたいなかんじで。〔そのとき自分ではそういうつもりではなかったんだよね？　友達の家に行ったときには。〕その人が遠くに行くんですよ，あの一，学校がI（市名）で。それで，その次の日に（I市に）出るんだったんですよ。だから，じゃあ泊まろうかみたいな感じで，友達んち泊まって。その人が泊まる予定だったんですけど，私もついでに泊まったんですよ。…（中略）…ほんとは別の友達の家に泊まる予定で。〔じゃあむこうも多分そういうつもりではなかったわけでしょ？〕あ，でも，言われたりはしたことあります。電話で，なんかそういうなりゆきで，いやあ…。〔（セックス）しちゃおうよみたいな？〕みたいな，みたいな。その前日ぐらいに言われて，電話もしてて，メールとかもしてて，それで。どんどんどんどん時間たってったら，明日いなくなるんだとか思って。向こうも（もう会えなくなることを）言うじゃないですか。ああいいやとか思って。

B：〔そのとき（初交時）は，言われて，自分でもまあいいかって思った？〕ううん。最初はやだとかなって，それでももうなんか，いつのまにか。

Aは，性行動をとることに対する自分自身の意思を持っていない状況で，翌日相手が遠隔地へ発ち，なかなか会えなくなるという状況に後押しされて，性行為に至っていた。また，Aの友人Bは，交際約1ヶ月後から性行為を求められるようになり，要求を断り続けていたが，結局自分の意思を十分に伝えられず，納得していないままに初交に至っていた。

この2名と対照的に，Dの場合は自分が納得するまで相手の性要求を断っていた。相手は中学生のときにも交際していたことのある男性で，2度目の交際開始から約5ヶ月後に性的な要

求を受けたが，Dの希望で性交には至らず，ペッティングの関係を半年間続けた後に合意の上で初交を経験した。しかしその後，「会ったら絶対」セックスをする関係に疑問を抱いたDが相手の性要求を断った際には，「えー，なんで？　いいじゃん」と言う相手に押し切られ，結局性行為を受け入れていた。

3）避妊およびコンドーム使用の不徹底

調査Iによれば，性経験群のうち初交時に避妊をしたのは男子の60.5%，女子の70.1%であり，コンドームを使用したのは男子の45.5%，女子の59.8%にすぎなかった。また，妊娠に対しては8割以上が「気になる／少し気になる」と回答しているにもかかわらず，初交以後の性行為においていつも避妊をしているのは33.2%にとどまっており，性感染症に対する意識が低い（4割弱が「あまり気にならない／気にならない」と回答）という問題が見られた。さらに，調査IIの性経験者の言葉は，性行動の突発性やカップル間の意思疎通の不十分さに加えて，避妊や性感染症についての知識のあいまいさや誤りの多さも，若者の予防行動を妨げる大きな原因となっていることを示唆していた。

B：〔避妊してくれた？〕はい？　ヒニン…？　ヒニンて何？

A：中だし(膣内での射精)はしてないですけど。コンドームとかはつけてない。〔お互い持ってもいなかった？〕持ってなかった。〔避妊のこととか，全然話さなかった？〕なかった。…(中略)…(安全日は)一週間前って習ったんだけど。…生理が終わって，2日3日後ぐらいが危険？　先生そう言ってましたよ。2，3日後からが危険。生理の2日目か3日目ぐらい，が危険日？　なんか，2日3日がどったらこったらっていうのは覚えてるんだけど。

D：〔安全日とか，気にしてた？〕いや，してなかったですね。〔ちゃんと生理来るかなあ？　とか心配じゃなかった？〕あ，いや，一回ぐらいじゃそんな，ってわかってたから。

4）性行動の日常化

初交経験は，必ずしも高校生が性行動をとり続けることにつながるものではない。たとえばAは初交を最後に半年間，Iは最後の相手との交際が解消されてから1年弱の間，一度も性行動をとることなく過ごしている。しかし，いったん初交を経験すると，その後の性行動が活発化しがちであることも事実である。調査Iによれば，性経験者の55.4%は最後に性関係のあった相手と，週に1回以上の割合で性行為をとっていた。「会ったら絶対(セックス)してたかな。でもそこまで毎日会ったりとかしてなかったから，1週間に1回とか」というDの発言は，高校生の交際において性行動が日常的なものとなっていることを示している。また，新たな交際相手をもつようになった際にも，性経験があるものは性行為に至りやすいようである。Dが調査時に交際していた男性は彼女にとって2人目のセックスパートナーだったが，交際から1週間後「いちゃいちゃしてて，なんとなく」性行為に至っており，それについてDは「全然嫌じゃなかった」と言っている。また，Iは中学2年の夏から高校1年の秋までに7人の女性と交際しており，そのうち5人と性的な関係を結んでいる。

このように性行動が日常化すると，親の保護下にある高校生特有の問題として，性行為のための空間の問題が生じてくる。たとえばDの場合，パートナーと2人きりになれる場所を用意する金銭的な余裕はなく，隣の部屋に誰かがいるような状況で，家族に気づかれるのではないかという不安を抱えながら性行為を繰り返していた。こうした状況は，セックスパートナーを

もつ高校生の半数以上が週に1度以上の割合で性行為をしていることと照らし合わせれば，多くの若者に共通するものだと考えられる。

D：〔(自分の部屋でセックスするのは) 嫌じゃなかった？〕うん。隣の部屋に誰かいたりとか，誰か入ってくるとかわかんなかったりしたから。〔相手のうちのときも？〕誰もいなかったけど，誰か帰ってくるんじゃないかなーとか。全然もうなんか，安心できないから。〔そのことが嫌で(セックスを)やめたいとか思ったことはない？〕あります。でも…。

(2) 性行動に対する意識の特徴

1）性行動に対する意識

調査Iでは，「きちんと避妊していれば高校生であってもセックスしてかまわない」という意見に対し，性経験がない生徒であっても男女とも85%以上が「(わりと)そう思う」と回答しており，生徒の大多数が高校生の性行動を容認していることが確認された。

調査IIにおいても，同年代の若者が性行動をとること自体に否定的な高校生はおらず，「責任が取れるなら」「本人が納得しているなら」高校生であってもセックスしてかまわないという意見がほとんどであった。また，交際経験のあるものは性行動に対してそれほど大きな抵抗感を持っていないように見受けられた。たとえばGは，告白による交際関係を築く前に，抱き合う，キスをするなどの行動をとっていた。また，Jはこれまでに交際した2人の男子との関係について「そんなに深いおつきあいではなかったので…」と述べているが，キス経験は持っていた。

性経験のある4人に関して言えば，彼（女）らは自らのプライベートな性経験を他人である調査者に語ることについて，ほとんど抵抗を持っていないように見受けられた。また，初交前からすでに，性行動を近い将来自分の身に起こるものとしてとらえていたことがうかがえた。

B：付き合って…1ヶ月くらいたってからも（セックスしようと）言われてて…〔そのときはどうした？〕いや，だめって。〔キスとかはしてたの？〕うん。〔それで，悩んで相談したりとかしてた？〕…そんなに悩んではないですけど。悩んだかもしれないけどどうしようみたいな感じで，いつかは絶対やばいなあとかって。

A：〔進んで(初交を)したわけではないけど，そのことに後悔はしてない？〕え，だっていつかは。いつかは。

AやBは納得して初交に臨んだわけではなかったが，そのことに対する後悔の念はなく，上記の発言からは，「いつかは」経験することなのだからと，自らの性行動を割り切って捉えていたことが読み取れる。また，自分自身の意思で初交を断っていたDについても，「結婚までは」「責任がとれるようになるまでは」性交を控えたいというよりは，「自分が納得するまでは」という気持ちから初交を延ばしていたにすぎない。調査Iにおいて，初交経験時に罪悪感をもったものが男女とも2割弱であったことは，多くの高校生が自分自身の性行動をいけないもの，あるいは早すぎるものとしては捉えていないことをうかがわせる。したがって，今日の高校生にとっての性行動に対する迷いとは，性行為そのものをするかしないかという次元ではなく，「いつするか」という次元のものであるように見える。

しかし一方で，自分には関係のないこととして性行動を捉えているインフォーマントもいた。そのほとんどは「相手があってのことだからねえ（L）」というように，交際経験のない生徒で

ある。彼（女）らは高校生の性行動について，「(セックスしている高校生の気持ちが理解できるか否かという問いに対して)理解できないとかいう問題じゃなくて，ま，そんなもんなんだって（H)」というように，それ自体に否定的な見方をとってはいないものの，自分自身とは切り離して捉えている傾向があった。

2）親世代の意識

調査Ⅰでは，男子の64.9%，女子の55.1%は親が高校生のセックスを容認していると考えており，男子の40.8%，女子の25.0%はもし自分がセックスしていることを親が知っても親は何も干渉しないだろうと考えていた。このような意識は，40代・50代のうち18歳未満の若者のセックスを容認していたのが15.8%にすぎないという親世代の意識[8]とはかけ離れたものである。やや極端ではあるかもしれないが，Aの事例は，こうした意識の乖離を顕著に表している。

A：〔(セックスしたのは）どこで？〕友達（男子）の家。〔誰といたの？〕私とその人と，友達の家に泊まってたんですよ。〔友達は？〕いましたよ，横に。ちょっと半寝？　半分寝てて，メールとかしてたんですよ。…（中略）…〔隣に友達うとうとしてたんだよね？　平気だった？〕多分気づいてました。〔何か言われなかった？〕なんか，後でその友達はメールでいろんな人に言ってたっぽい。〔それって友達の部屋？〕うん。〔そこが友達の家だと言うことは気にならなかった？〕私は気になったけど。でも相手が「よく知ってるやつだし大丈夫だよ」とか言ってきて。〔友達のうちに泊まったこと，その友達の家の人は知ってたの？〕知ってました。親が許可出してくれたから泊まったんで。

親の許可を得て友人の部屋に泊まったという状況は，友人の親が，男女二人きりになるわけではないのだから性的な行為はできないだろうと考えていたことを推察させる。しかし，間近に友人がいたことは，Aたちにとって抑止力とはならなかった。親世代の意識や認識が高校生の意識とずれていたことが，このような状況を生み出すひとつの要因となったことは否めないだろう[9]。

一方で，外泊をめぐっては，親が子どもの行動を掌握しようと努めているケースもあった。LやM，Nは，数日前から親の許可を得ておかなければ友人宅への外泊を許されず，当日には相手先に親が挨拶の電話を入れると言っている。このような親の行動は，初交時にAが「親が許可出してくれたから泊まった」ことや，「(外泊も）してます。親には友達んち泊まるってウソついて」というDの状況にくらべると，非常に慎重なものであると言える[10]。

しかし中には，親が子どもの性行動を知って，なおかつ容認しているケースも見られた。

Ⅰ：んとね，最初に言われた言葉がね，「(初交が）俺より早いじゃねーか」。〔それ，いつ？〕中2の終わりぐらい。〔お父さん，自分はいつだったとか言った？〕高1らしい。おっしゃ，2年勝った！　って。〔「(妊娠させたら）責任とれよ」っていうふうな感じで，取れるんならべつに（セックスしても）かまわないって（父親に言われたと）いうのは，それは…〕おじいちゃんがお父さんに言った言葉らしい。

D：1回ですね，あの一，私自分で性病になったと思って，で，どうしようと思って，でも病院に行くにも親に言わなきゃいけないから，なったかもしれないんだけどって（母親に）言ったことがあるんですよ。そしたら…（中略）…「ええっ？」とかなって。「あんたそういうことしてんのかい？」って話になって，「そうだよ，まわりみんな絶対そうだよ」って話になって。「ああ，今の子ってみんなそうなんだ」みたいな話に。…(中略)…「ま，自然のなりゆきだししょうがないけどね」とか，そういう人ですね。〔お父さん知ってるのかな？〕言わないけどわかるんじゃないですか？　普通に。

親が子どもの性行動について明らかに許容的なDとIのケースを除いては，子どもの性経験の有無に関わらず，ほとんどの家庭が「まったく触れない，そういう系は。結構秘密主義。みんな家族が（A）」「ぜんぜん，聞いたこともないし。絶対家で（性の話題が）出ないから（L）」という状況にあった。こうした親子関係の中では，親が子どもの性行動の状況を把握していない，あるいは親自身の考えや価値観を子どもに伝えられないでいると推察される。一方で，そのような親に対し，高校生は次のように考えていた。

J：まあ，今はあんまりそういうことしてほしくないと思ってるだろうけど，そういうことする子だとはあんまり思ってないと思う。

A：多分（セックスすることは）ダメって言うと思います。でも全然気にしない。逆に考え方が同じでも気持ち悪い。

I：親父？　友達みたい。〔考え方のギャップを感じることってある？〕いや，ない。「なんだ，同じじゃん」って。

3）性行動とジェンダー意識

これまでに述べてきたような高校生の性行動や性意識からは，「性に対して非常に積極的な現代の高校生」の姿が浮かび上がってくる。しかし，性経験のあるA・B・Dの3人の女性について見てみると，性行動に対してまったくハードルを感じていなかったわけではないことが読み取れる。初交経験について「やっぱ，初めてって特別じゃないですか」というDの発言や，「（次に恋人ができた時）好きだったら別に，もう（セックスすることをためらわなくても）いいんじゃないかな」というAの発言は，初交に対して彼女たちが特別な感情を抱いており，初交を経験したことがその後の性行為に対する抵抗感を減少させたことを示唆している。さらに，性交を拒否したことで気まずくなり，それが交際を破綻させるきっかけとなったAの事例や，会うたびに性行為をすることに「私，それだけなのかな，って思っちゃったり」したものの，結局は相手の要求するままに性行為に応じることになったDの事例は，高校生の性行動においてもジェンダーの問題が大きな課題として存在していることを示している。上記のような意識は女性のインフォーマントからは語られたものの，男性の側には見られなかったものであり，今日の高校生の中にも性のダブル・スタンダードが存在していることを垣間見せている。

3．友人グループの分化と性行動に対するピア・プレッシャー

二つの調査からは，交際や性行動が生活の中で日常化している高校生の存在が明らかになった。その中で非常に興味深いのは，友人との関係，とりわけ友人に対する意識が性行動にもたらす影響である。たとえばAは，中学3年生の時に交際相手から性行為を求められ，拒否したときのことについて次のように話している。

A：それ（最初のセックスは特別だということ）と，周り？　あの時周りがまだ全然そんな感じじゃなかったんですよー。で，全然そんなの聞かなくって，それこそキスしたしてないで騒いでた時期だから，「はっ？何言ってんの？」って感じもあったんですよ。

周囲の友人に同調しようとする気持ちは，性行動の面に限らず，思春期において特に強くは

たらく心理であり，それが中学生や高校生の性行動に与える影響は少なくないだろう。同輩や友人による圧力（黙示的なものを含む）によって，何らかの方向付けが行われる状況は「ピア・プレッシャー」と呼ばれているが，性の問題をめぐる意識や行動において，友人はどのように影響を与えるのだろうか。

(1) ピア・プレッシャーと性行動 ── Iの事例から ──

ピア・プレッシャーが性行動に与える影響を顕著に見ることができるのがIのケースである。また，このケースには第2節で述べた，高校生の性行動を特徴的に示すような事例も多く含まれていることから，やや長くなるが，Iのこれまでの性行動の経過をたどってみよう。

《1人目①》中学2年のとき，地元の遊び仲間の一人であった中学3年の女性と交際を始めて半月後，相手から誘われて。

〔ホテルのお金，どっちが出したの？〕向こう。もちろん！　そんなん出さないよ。だって向こうから誘ったし。〔それまでに誘われたり誘ったりしたことってあった？〕ない。ノリで。「じゃあ行くかー！」って。〔じゃあ，お互い合意の上だったんだ？〕うん。〔避妊した？〕いや。〔相手に避妊してよとか言われなかった？〕中に出すなよって。〔で，外だし（膣外射精）した？〕うん。〔そのときセックスした動機ってなんだったの？〕ノリ。ノリ大切だから。〔むこうから誘われたって言ったけど，相手は初めてじゃなかったってこと？〕うん。〔相手の性経験は知ってたの？〕一人だけ知ってたけど，残りはわかんない。

「ノリ」でホテルに行ったというIの行動は，相手の女性が同じ友人集団に属している年上の女性であり，相手には性経験があるが自分にはないという状況でとられたものであった。「ノリ」という言葉には，その場の雰囲気を興ざめにしたくないという気持ちや，自分が浮いた存在になりたくないという気持ち，さらに，後にはひけないという強がりが感じられる。①との関係においては①がIを全面的にリードする形で交際が進んでおり，ホテル代やコンドーム代も①が全額負担していたが，こうした状況は，調査Iにおいて，自由に使える金銭が多い女子に性のハイリスク行動が多く見られたことと整合性をもっている。

《2人目②》①と重複して交際していた同級生と，「なんとなく，いつのまにか」始まった交際から約1週間後，Iの部屋で。相手もIとの関係が初交ではなかった。

ムードは向こうが作ったんだけど，こっちが誘ったみたいな感じ。

《3人目③》中学3年のとき，①の友人であり，Iの遊び仲間のメンバーでもある1学年上の女性と，交際を始めて半月後，Iから誘って。彼女には性経験がなかった。

〔3人目の人は初めてだったの？〕うん。〔嫌だって言われたとかは？〕いや，なんか，覚悟決めてたみたいだから。〔どれくらい付き合ってから？〕うーんっとねえ，たぶん半月。場所はホテル。（ホテル代は）ワリカン。〔ホテルに行こうということはどちらかが誘ったわけですね？〕ぼくが。話し合いはしたね。したから覚悟を決めてたわけで。〔どんなことを話し合ったの？〕え，「いいじゃん，しようよ」って。「え，何が嫌なの？」って。〔そのとき避妊した？〕うん。した。しなきゃやだっていう結論になった。

このケースは，性行動の活発な友人グループへの所属が初交に与える影響という点だけでなく，ジェンダーによる比較という点からも注目すべき事例である。③のケースを初交時の①とのケースと比較してみると，初交が男女間で異なった受け止められ方をしていることがわかる。男性であるIは初交時，ほとんど抵抗なく相手からの誘いに応じたのに対し，女性である③は何度も誘いを拒否している。③はIや①の遊び仲間のメンバーで，①（Iを初交に導いた女性）は彼女の親友であり，「（①の性経験の相手について）一人だけ知ってたけど」というIの発言から察すると，①が以前に性交渉を持った相手もまた，Iにとって（おそらくは③にとっても）身近な男性であったと考えられる。遊び仲間の多くが性経験を持っているというプレッシャーを③が受けていたことはIも感じとっており，彼女が逡巡する様子をからかっていた節があった。彼女は自分に性経験がないことを遊び仲間の中で引け目に感じ，それを乗り越えようとしたからこそ，「覚悟を決めて」初交に臨んだのではないだろうか。

《4人目④》中学3年のとき，遊び仲間である先輩の紹介で知り合った大学の一回生の女性（ただし大学にはほとんど行っていなかった）と，交際を始めてから3，4日後に相手から誘われて，親が旅行中だという女性の自宅で。

〔どっちから？〕向こうから。誘われたから，「うん，わかった。」って。…（中略）…〔向こうは結構そういう経験があったのかね？〕あったと思うよ。〔そういうことについて聞いたりしたことあった？〕でも，慣れ具合で。だいたい，「あれ？」って。「けっこう慣れてる」って。

年上のパートナーにリードされる関係は①との交際においても構築されていたが，中学生と大学生という圧倒的な年齢の差があるこの女性との交際が自分の恋愛観やセックス観を変えるものだったことについて，Iは「なんか，大学生でああって思っちゃった。だから，こいつ（⑤）とはそれほどそんな（セックスしようという）気にならなかった。」と語っている。

《5人目⑥》高校入学後に交際を始めた，性経験のない同級生と，夏休みの帰省から高校のある町に戻る際，一緒に宿泊したフェリーの個室内で。

〔どっちが誘ったの？〕自分。夏休み最後のほうに（Iの実家に彼女が）きて，一緒に（高校のある町に）帰った。〔じゃあそれって，計画的だったわけ？〕けっこう。〔相手もそのプランに乗ってきたわけだ？〕乗って…うん。うまくなんか，レール敷いた上で，脱線せずに来てくれたから。〔避妊は？〕しませんでした。（コンドームは）あったけど忘れたって言って。〔それ，わざと？〕わざと。〔それで嫌だとか言われなかった？〕「えー，ホンマにぃ？」って言われたけど，「ホンマホンマ」って。〔相手は（性経験が）初めて？〕初めて。

⑥も③と同様にIとの関係が初交であり，「旅行中」「フェリーの個室」「コンドームがない」という既成事実を用意したIにリードされて性行為に至っている。①や③，⑥の事例からは，性経験のある側が性経験のない側をリードし，プレッシャーを与えつつ，性行動に巻き込んでいく状況を見てとることができる。

Iの経験は一例に過ぎず，やや極端な面があることも否めない。しかし，性経験のあったインフォーマントは，先述したカップル内の年齢差や性経験の非対称性によるプレッシャーの影

響下にあったことに加えて，第4節の(1)で述べるように，男女が入り混じった親密な友人グループ内でしばしば交際関係をもっていた。このことから，カップル内の性行動が当然視あるいは自然視されるグループの雰囲気は，初交に対するプレッシャーを与えているように見受けられる。以下では，こうした友人グループについて，さらに分析を行う。

(2) 友人グループの分化と性への関心

調査Ⅰでは，親やきょうだいと性について話すことがあるものは男子で2割，女子で3割前後だったのに対し，友人との間では男子の8割，女子の9割が性を話題に取り上げることがあった。つまり，友人は若者がもっとも頻繁に性に関する話をしている相手であり，高校生の性行動に少なからぬ影響力を持っていると考えられる。しかし，(1)のⅠの事例のようなプレッシャーがすべての高校生の中に存在しているわけではなく，中にはほとんど性について話題にしない生徒もいた。そこで，ここでは高校生の友人グループの分化と性への関心について整理してみたい。

友人との間で性のことが話題になるか否かは，周囲の友人や，所属している学校の雰囲気と大きく関係していた。調査Ⅱにおいては，性に対する関心の強い生徒と弱い生徒がそれぞれ異なるタイプの友人グループに属しており，インフォーマント13人を大きく3つの群に分けることができた。以下，それぞれの特徴を説明していく。

①　よく性の話をする／聞くことがある群（A・B・D・H・I・E・J）

この群に属するインフォーマントは，学力レベルが中位や下位の学校に通っていることが多く，周囲の友人に性経験があるものが多い。また，セックスや妊娠に関して友人から相談を受けた経験があるものは全員ここに属していた。

A：でもやっぱり，彼氏のいる友達が，なんか，（キスやセックスを）してるとかは，やっぱ気になる。聞かないとやだ。秘密にされてるみたいで。

D：〔感覚としては結構ほとんど（の友人に性経験がある）なの？〕うん。〔男の子も？〕男の子も。

②　むしろ中学校の時のほうが性の話題が多かった群（G・K・L）

この群のうち，KとLの2人は学力上位校に通っており，現在の友人には，性経験のあるものや恋愛に夢中になっているものはいない。Kが言うように，彼女たちは「荒れている中学校」から学力上位の高校に入学したことで周囲の友人の層が変化し，交際や性に関する話があまり耳に入らなくなったのだと考えられる。つまり，この群に含まれているのは中学校のときには①群に属するような友人との交流がしばしばあったが，高校になってからはむしろ③群に属している生徒である。

K：高校入ってからは，なんか，全然聞かない。〔中学のときのほうが聞いてた？〕はい。最近はまずないですね。中学のときはありました。やっぱり，荒れてるといえば荒れてる学校だったから。

L：中学のときは，なんか，ほんとなのかな？　とか思うような話もあったりして。尾ひれが付いてくから。そういう話題になると，「Lには早いからあっちで遊んでなさいねー」とか言われたりした。

G：よくはしないすけど。中学校のころですかね，まあ，興味ある年頃じゃないすか。そのころにけっこうしてましたね。今はそんなにしてないす。中学校のころが激しかったなー。

③　周囲で性に関する話題がほとんど出ない群（F・M・N）

この群では，交際している友人や性経験がある友人が身の回りに少なく，性に対する関心が弱いものが多い。Nは，中学生のときにも，周囲に恋愛や性に強い興味を示す生徒とは深い友人関係にならなかったと述べている。

M：（性に関する話題は）ない。ていうか興味がない。部内の女子は，全然興味のない人ばっか。恋愛に興味がない人もやっぱいるんですよ。それでここ（性の話題）まで発展することはない。

N：ほんとに仲いい友達は恋愛とか興味なくて，話題にもならない。〔中学のときはどうだった？〕そういうこと好きな人とは，どうしても，深く突っ込んだ話にはならない。〔距離を置いてるんだ？〕なんか，自然に距離ができてるっていう感じなんで。

③群に含まれているNの発言は，実際には周囲で性に関する会話がなされていても，友人グループが異なっていればそこに参加していくことはなく，こうした話題にほとんど関わっていかない生徒の層が存在することを示唆している。つまり，若者の生活や性行動は学校集団の構造効果が持つ学校間の差異によって分化していることに加え，校内でもグループによって分断されており，交際や性のことが話題にのぼる頻度や交わされる情報はグループごとに異なっている。このように分化した友人関係の中では，①群において性行動を促進させる効果が相対的に強いと考えられる。

4．グループ分化の影響とその背景

(1) グループ分化と交際や性行動に対する意識

上述のように，高校生の中では交際や性に対する興味や関心の近いものどうしが集まってグループ化した友人関係が築かれている。調査IIでは，こうしたグループ間の差異が，交際に対する高校生の意識に影響を与えていると考えられる点がいくつか見られた。

1）交際に対する友人の影響力の違い

非性経験群では交際に関して，「自分が好きでなければ付き合わない」「自分が納得しているかどうかが大事」といった発言が多く見られ，友人の意見や意識をあまり気にしない傾向が見出された。それに対し，交際経験者の交際事例には，友人が大きな役割を果たしているケースがしばしば見られた。たとえば，友人どうしでインタビューを受けたA・B，L・Mは，自分の交際経験について友人の前で語ることにほとんどためらいを持っていなかった。特にAとBは，「秘密って，ない」「なんか，全部友達に言わないと，隠し事してるみたいで嫌なんですよ」と言い，親しい友人には普段から自分の交際について，性経験を含め，何でも話していた。彼女たちは，恋人ができたときや別れたときにはすぐに周囲の友人に報告しており，その点は他の交際経験者にも共通していた。友人に告白を仲介してもらう，あるいは悩みが生じたときに友人の意見を仰ぐといった行動は，特に女性のインフォーマントに多く見られたが，時には交際に関して，交際相手以上に友人の存在が大きな影響力をもっていることもあった。

A：〔これまで，どんな人とお付き合いしてきたの？〕クラスの人もいますけど，小学校も一緒だったとかいろいろ。〔小学校のとき一緒だったっていうのは関係あるんだ？〕やっぱりなんか，付き合うきっかけのときに，性格考えたりするときに，小学校の時の性格知ってたら，「ああ，（あの人の性格は）よかった」とか。小学校のって（今の性格に）関係あるじゃないですか，結構。性格良かったよとか友達にも言えるし。

また，男女が入り混じった遊び仲間の友人グループそのものが交際の機会を作り出しているケースも多く見られた。6人との交際を経験したAの場合，そのうちの3人（表3　Aの②・③・⑤）は幼いときからの遊び仲間であり，Iは，異年齢集団の中で3人（表3　Iの①・③・④）と交際している。またBやDの交際の一部においても，同様の交際が行われていた。これらのグループ内では相手を変えながらのカップル形成・解消が頻繁に起きており，交際を活発化させる地盤を形成していると考えられた。

2）交際に対する感覚の違い

友人グループが異なることは，交際に対して高校生が抱く感覚にも違いをもたらしていた。たとえば，交際期間が短いことは高校生の交際の特徴であるが，どの程度の期間を「長い」あるいは「短い」と感じるかは，インフォーマントによって異なっていた。Aの考えは「半年付き合えば長い。普通，3～4ヶ月？」というものであったが，Jは「(短いのは) 半年以内，かな。(長いのは) 2年とか？　でも，1年でも長いかな。」と答えた。このような感覚の差は，おそらく周囲の友人の交際や自分自身の交際経験から作り出されたものであり，高校生の交際に対する意識が多様であることの一端を示していると言える。

また，交際解消後の元恋人との関係のとりかたについての意識にも，違いが見られた。「友達の中で，付き合ってる子はほとんどいない」「うちらの友達，あんまりそういうこと（恋愛）自体に興味ない人が多いんですよ」という環境で過ごしているLとMは，「交際を経て男女が別れたら，その後，彼らが仲の良い友人にもどることは難しい」という感覚を持っていたのに対し，所属するグループ内で男女が相手を変えながら交際することが頻繁に起こっていたAやIは，ステディな交際関係が終わった異性と，その後も友人として遊んだり連絡を取ったりし続けていた。彼らにとって交際は通過点的なものであり，たとえそこに性的な関係があったとしても，その後のグループ内での交友関係に禍根を残すことはほとんどなかったようである。このような違いもまた，交際や性行動に対する若者の意識に対し，友人の意識や行動が大きな影響を与えていることを示唆している。

3）性行動の経験時期に対するイメージの違い

インフォーマントの多くは中学生や高校生でキスを経験するものだというイメージを持っていたが，非性経験者はセックスに関して特定の時期をイメージしていたものが少なく，Nは「大人になってから。ある程度責任がとれるようになったら。」と考えていた。それに対し，性経験のあるものや友人との間で性に関する話題が頻繁にのぼるものは，中学生や高校生でセックス

表4　問「『このくらいの時期にキスやセックスを経験するものだ』というイメージを持っていますか」に対する回答

	①性に関して頻繁に話す							②以前は話題になった			③ほとんど話題にならない		
	A	B	D	I	J	E	H	G	K	L	M	F	N
キス	中3	−	中学生か高校生	昔は高校からだと思ってた。自分早かったけどね。	もう最近はわかんないですね，現代っ子。まあ高校生になっちゃえば…。	わかんない	自分ではイメージはないけど，周りでは中3くらい。大体は高校で済ませるとか言う話は聞いた。	高校生くらい	いつでも年齢に関わらず。	中学校のときは17とか友達と言ってた。	16,7.	イメージはない。	今，幼稚園児でもしてる。
セックス	中3から高1	−							ない	ない	ない		大人になってから

を経験するものだというイメージを持つ傾向があった。こうした違いの背景には，自分自身の経験や感覚に加えて，身近な友人の性的経験の有無や時期，性行動面での活発さなどによって生み出されるイメージの差があると考えられる。

4）性行動に対する感覚の違い

IとMを除いては，早く性経験を済ませる必要はないと考えていたが，インフォーマントの多くが性行動を「いつかは」自分も経験するものとしてとらえており，K・L・Mは「20歳までに経験がないと恥ずかしい」と考えていた。しかし，こうしたイメージや周囲の噂話それ自体が，若者の性意識や性行動に直接大きな影響を与えている可能性は低いようである。例えば，数人の女性インフォーマントは，自分が予想もしなかった早い時期に周囲で性経験をもった友人の話や噂を聞いて驚いた経験を持っていたが，こうした話は彼女たちに驚きをもたらしただけで，そのことが性行動に対する焦りを抱かせる要因になってはいなかった。

J：中学生の時に，そういうことをしてる友達がいて，それをあとから聞いたときはショックだったけど。
K：〔中学のとき，セックスの話をしてる人たちがいて，「えー」とか思ったりしたことなかった？〕それでしたね，ほんとに。〔それ，何年生くらいのときの話？〕中1。ふふ。
L：誰かが小学生の時に体育倉庫でどったらこったらっていう話を聞いたから。ああ，そうなんだーとか思って。でも，体育倉庫微妙だなーとかって。〔それを聞いたのは中学生のとき？　小学生のとき？〕中学生のときかな。なんか，(体育倉庫事件があったのが小学校の)卒業間際で，中学校に入って直後にその話を聞いたんですよ。

彼女たちがこうした話題によってあせりを感じることがなかったのは，性行動を自分自身の問題として捉える精神的・身体的な発達段階になかったためだと考えることもできるかもしれない。しかしそれ以上に，身近な友人の間でこの話題がどのように受け止められていたかが大きく関わっていたと考えられる。つまり，こうした話題を耳にした時，自分が属するグループの中ではこうした性行動が「異端な行動」として受け止められ，その見解が共有されることで，性行動が自分とは無関係な問題として内面化され，自分自身を性行動へと方向付ける契機とならなかったのではないだろうか。

それに対し，性経験があったインフォーマント4名全員が遊び仲間のグループ内で交際した経験を持っており，初交のうち3ケースは性経験のある相手とのものだったことは，彼（女）らの友人グループにおいては性行動が異端な行動として受け止められておらず，むしろ「交際しているなら，して当然のこと」として捉えられていたことを推測させる。性経験のないメンバーにもこうした友人グループの感覚が内面化されている状況に，大人に近づこうとする気持ちや，グループ内で子ども扱いされたくないという気持ちが加わって，彼らを性行動へ向かわせる力が生まれているのだと考えられる。

友人との接触の中で作り出される2）～4）のような感覚の違いは，実際の交際や性行動そのものや，その意味づけにも異なった結果をもたらすだろう。さらに，それぞれのグループ内でこうした感覚が共有され，内面化されていくことで，性行動に対するグループ間の分化が目に見える形で現れているのだと考えられる。

(2) 性をめぐる分化の背景

ところで，高校生の性をめぐる上記のようなグループ分化は，いかなるメカニズムによって生じているのだろうか。第3節の(2)では調査IIのインフォーマントを3つの群に分けて整理したが，その際，所属する高校の学力レベルに関し，性に対して積極的な①群には学力レベルが比較的低い高校の生徒が多く，②群や③群には学力上位校の生徒が多いという傾向が見られた。調査Iにおいては，学力レベルの比較的高いB校の生徒と学力下位校であるC校の生徒とのあいだで，性に対する関心自体にそれほど大きな違いは見られなかったにもかかわらず，実際の行動においてはB校の性経験率が男子28.2%，女子34.1%だったのに対し，C校では男子39.5%，女子67.7%と大きな違いが認められた[11]。

学力の異なる学校間で生徒の性経験率が異なることは，友人関係が高校生の性行動に与える影響と無関係ではないと考えられる。友人は高校生の性行動に影響を与える要因となるが，どのような友人をもつかということ自体が，さらに大きな要因によって規定されている。学力レベルにより生徒を各高校にふりわける現在の高校入試の制度は，同年齢層の若者を学力によって層化し，他の層から分断する機能をもっている。さらに同じ学校の生徒は学力レベルが近似しているだけでなく，高校卒業後の進路においても一定の傾向を持つことになる。

調査Iのうち，同一学区内にあるB校とC校のデータを用いた性経験率の比較によれば，高校卒業後にどのような進路を希望しているかよって，生徒の生活状況や性経験率には大きな差が見られた[12]。大学進学を希望している生徒（大学志向群）は勉強を中心とした高校生活を送っている傾向があり，アルバイトをしているものは非常に少なかった。したがって，友人関係の多くは校内で築かれていると考えられる。それに対し，高校卒業後すぐに就職することを希望している生徒（就職志向群）は，家庭学習をしているものが少なく，アルバイトに従事するものの割合が多かった。これは就職志向群の生徒が，志望大学への合格といった具体的な目標に向かって勉強する状況になく，学校生活へのコミットメントが弱いことが一因であると考えられる。卒業後の進路希望によって性経験率を比較したところ，大学志向群の性経験群が24.3%だったのに対し，就職志向群の性経験率は39.2%にのぼっていた。

さらに，勉強やアルバイトと性行動との関係について見てみると，家庭学習をしているものの性経験率は24.5%だったのに対し，していないものでは45.5%，アルバイトをしているものの性経験率は56.3%だったのに対し，していないものでは32.1%であった。ここから，勉強を中心とした生活を送っているものは比較的性行動をとりにくく，アルバイトをしている生徒は性行動にかかわりがちな傾向があることがわかる。とくにアルバイトは高校生にとって，人間関係を構築する場としても機能しており，学校以外の場所で異年齢や異性の人間と出会うことが交際の機会や態様を広げていると考えられる。

高校生の生活にこのような違いが生じる要因は何なのだろうか。根本的なもののひとつとして，家庭の経済的・文化的な基盤の格差の問題があると考えられる。就職志向群と大学志向群とを比較した場合，家庭の経済的な問題で悩んでいるものが前者では33.2%を占めるのに対し，後者では17.6%にとどまっている。また，大学志向群では57.4%，専修学校・短大志向群では77.2%が将来の具体的な希望を持っているのに対し，就職志向群では43.7%しか具体的な希望をもっているものはない。つまり，就職志向群のうちかなりの割合の生徒は，将来に対する目標や希望がないままに勉強を中断し，働かざるを得ない状況におかれているのだと考えられる。さらに，経済的な悩みを持っている生徒には，家族の不仲や家の狭さ，親の無理解といっ

表5　卒業後の希望進路による比較

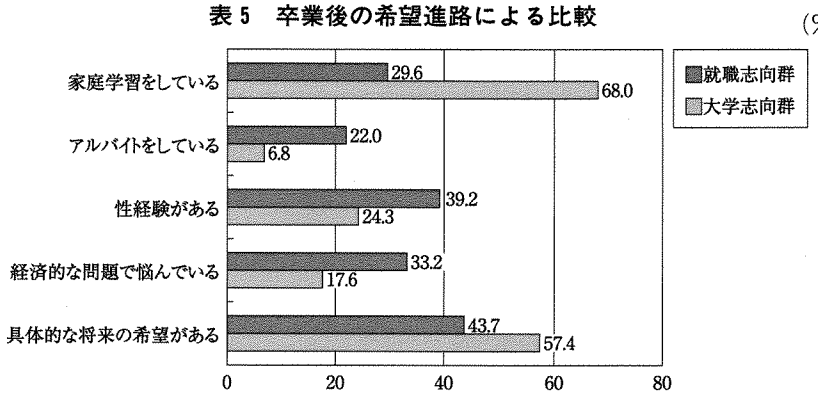
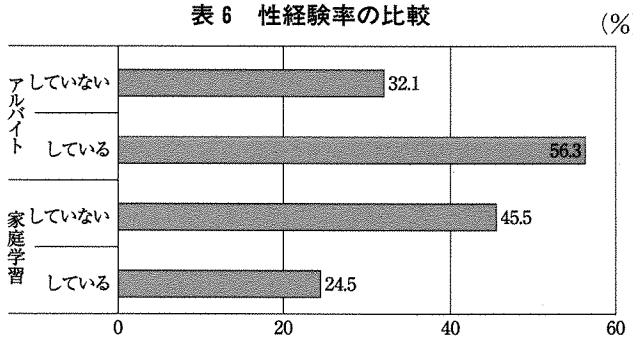


表6　性経験率の比較



たことでも悩んでいるものが多く，家庭生活上の困難を負いがちな傾向がある。また，子どもを進学させることが困難な状況にある家庭では，経済力が不足しているだけでなく，学校型社会に適応する上で有利となるような家庭環境がととのっていないことも多い[13]。本人の努力や責任以前の段階で不利を負い，学歴達成や資格の取得によって職業的な自己実現を図ることが困難な若者が，アルバイト代で欲しいものを手に入れる，あるいは気の合う友人や恋人と楽しく過ごすといった形で，「今」を楽しく生きることを志向しようとするのは無理からぬことのように思われる。「困難や悩みを抱えた生活」「目標ややりがいが見つけられないままに社会に出て行かなければならないことの不安」といった彼らの状況をそこに重ね合わせれば，自分に共感や理解を示し，受容してくれる他者との間に，より深い関係を築こうとすることは容易に想像できる。その相手が異性だった場合には，性行動もその手段として用いられるだろう。

早期の性行動をとる若者がトラブルの多い家庭に育ってきた傾向を持つことは，若者の性行動が「非行」として捉えられていた時期からすでに明らかにされていたが[14]，調査Ⅰの結果は，性行動が日常化した現代の高校生においても，その傾向が基本的に変化していないことを示している。とくに女子の場合，低年齢で初交を経験した生徒には，父親の不在や家庭の経済的な困難といった社会的不利層に特徴的な傾向が認められる。さらに，家庭生活で問題を抱えている生徒や目標学歴が低い生徒は，初交年齢が低いことに加え，これまでに性関係を持った相手の数が多く，避妊実行率が低いなど，ハイリスク行動をとりがちである[15]。

学力によって生徒が層化されている日本の高校では，似たような生活状況にあるものどうしが学校ごとに集まり，学校内でも類似した志向をもつ生徒によって形成される友人グループ内

部で相互に影響しあうことによって，性行動をめぐる分化が生まれている。また，学校の枠を超えて友人関係が形成される場合にも，類似した生活背景や学力，家庭環境を持ったものどうしがつながりをもつことが多いようである。調査IIにおいて，学力上位校に通うJ～Nが現在もっている友人関係のほとんどは高校内で築かれたものであったのに対し，A・B・Iが小学校や中学校時代からの「地元の友人」との交流を日常的に続けているのは，こうした類似性が居心地のよい時空を提供していることと同時に，彼（女）らが過去との強いつながりの中で生活しており，より広い社会とつながるような将来を志向した形での「今」を過ごしていないことの現れでもあるのかもしれない。

以上のことからは，若年者の性行動が広まっている昨今においても，高校生をはじめとする若者の性行動に家庭が極めて大きな影響を与えていることがうかがえる。家庭の問題は，経済的な不利や家族関係の不仲といった表層的なものにとどまらず，子どもがどの学校に行き，どんな友人を持ち，何を志向する生活を送り，どのような将来を歩むかといったことにまでつながっている。さらに，こうした家庭の問題は，学校制度や家族福祉のありかた，さらには社会の再分配システムといった社会制度の矛盾を露呈するものでもある。

おわりに

2つの調査を通じ，全体像を描き出すには不十分な点も多いものの，今日の高校生の性行動をめぐる状況について，以下のことを明らかにすることができた。まず，高校生の性行動は高校生自身の間で広く容認されており，実際の行動においても日常化の様相を呈し，中学生にまでその裾野が広がっている。しかしこうした性行動の日常化はすべての高校生に起こっているものではなく，交際や性行動の活発さには分化が見られる。この分化は友人グループの分化の様相とほぼ一致しており，学力や生活状況といった点についても同一グループ内の生徒は類似している傾向がある。このような分化の背景には，学力による高校生の層化と，さらにはそれを生み出す家庭生活の格差があると考えられる。つまり，高校生という同年齢集団の中で，全体としては性行動の活発化が起こっているものの，生活状況や友人からの影響を背景として，交際や性行動のありかたや意味には多様性があることが認められた。インタビューの終わり際にLとMが発した何気ない言葉は，その多様性と，それぞれのグループ間の溝の深さを物語るものであった。

L：え，こういうの（インタビュー）ってもう何人にも聞いたんですか？　ギャルとか聞きました？
〔うん，まあ，そういう感じの子にも聞いたよ。〕
M：えー，すごーい。ああいう人たちってもう何考えてるかわからない。すごそうだよね。
L：すごそう。別世界。

同年齢層の異集団の若者を「別世界」の存在として彼女たちに認識させているものは，高校生の段階ですでにはっきりとした分化された生活や志向をもたせるような社会の構造に他ならない。つまり，若者の性行動が分化した形で現れていることは，今日の社会において若者の生活が分化されていることの表象でもあるといえよう。

今回の分析を通じ，高校生の交際や性行動には友人グループが強い影響を与えていることが

明らかになった。今後は，若者のネットワークにおける友人の影響力についてさらに詳細な研究が行われる必要があり，日本においても若者の性行動に関して，友人関係がもたらす影響をはじめとする心理学的なアプローチの展開をまちたいところである。しかし，分析の中で友人関係そのものが独立に若者の意識や行動を形成しているわけではないことも見えてきた。高校生の性行動とそこにおける友人の影響を正しく把握するためには，その背景にまでさかのぼった分析と考察を行う必要がある。そう考えれば，学校や家庭のありかた，さらには社会のありかたそのものまでもが問われてくる。したがって，若者の性行動についての研究にあたっては，これまで海外でなされてきたような家族をめぐる問題との関係がさらに解明されていくことが必要であると同時に，社会構造そのものをめぐる部分にまで敷衍したアプローチが求められる。

〈注・文献〉

1 『朝日新聞』2002年7月24日。

2 『毎日新聞』2002年7月27日。この調査は東京都性教育研究会が2002年1月に都内公立学校の園児・児童・生徒を対象として行ったもので，東京都幼・小・中・高・心障性教育研究会『2002年度調査　児童・生徒の性』学校図書株式会社，2002年で詳細が明らかにされている。

3 鈴木佳代「現代高校生の生活と性行動」『教育福祉研究』第9号，2003年。

4 渡辺裕子「異性関係の変容と学校集団の影響」財団法人日本性教育協会編『「若者の性」白書：第5回　青少年の性行動全国調査報告』小学館，2001年，pp.61-62。

5 鈴木佳代「アメリカの性教育プログラム：その社会的背景と分析」『教育福祉研究』第8号，2002年。

6 Cooksey (2002) は児童期や思春期初期の友人関係が早期の性行動に影響を与えることを明らかにしたが，量的な研究にとどまっており，その中で友人関係がどのような影響を与えているかについては明らかになっていない。Cooksey, C, Elizabeth. Friendships and Early Relationships: Links to Sexual Initiation among American Adolescents Born to Young Mothers, *Perspectives on Sexual and Reproductive Health,* 34 (3), 2002.

7 代表的なものとして，冒頭であげた東京都の調査や，日本性教育協会が約6年おきに全国規模で行っている調査がある。これらの設問は，性行動および性意識に関する事項が大部分であり，具体的な生活状況との関連を見ることはできない。

8 NHK「日本人の性」プロジェクト編『データブック：NHK日本人の性行動・性意識』日本放送協会出版，2002年。p.252中の「18歳になる前にセックスをする」ことに対する個人規範の表に基づいて算出。

9 やや古いデータではあるが，三木らの調査では，実際には高校生の間でキス（20%）やセックス（6%）といった性行動があるにもかかわらず，ほとんどの親は高校生がこうした行動をとっているとは考えていなかったことが示されている。三木洋子・吉原サヨ子・佐藤ち江「高等学校における性意識調査から」『思春期学』第9巻第2号，1991年。

10 L・M・Nの父親が公務員や教員といった職業についているのに対し，AやDの父親は比較的リベラルな意識を持つと考えられる自営業や専門職といった職業についていた。一部の研究においては親の厳格な態度が援助交際等の性行動を助長する要因になっていることが示されており（速水，1997など），こうした親の態度が若者の性行動をどの程度規定しているのか，またどのような影響を与えているのかについては明らかでない部分も多い。速水由紀子「援助交際の実情と問題点」『世界の児童と母性』42，1997年。

11 C校女子の性経験率が非常に高いことについては学力や生活環境の問題だけでなく，校内男女比が8対2であること，アルバイトや中学時代の友人を通じた校外での出会いの機会が多いことなども要因として考えられる。しかし，他校女子においては中学生以下の段階で初交を経験したものが性経験者の4分の1以下だったのに対し，C校では65.2%を占めていたという事実は，高校入学以後の生活環境以上に大きな要因が彼女たちの性行動の背景に存在していることを示している。

12 鈴木佳代「前掲論文」(2003年)。

13 調査Iでは，大学志向群の94.7%が自分の勉強机を所有していたのに対し，就職志向群の所有率は74.6%

であった。一方，テレビの自己所有率は大学志向群が65.5%，就職志向群が72.7%であった。

14　1990年代以前には若年者の性行動が非行問題として扱われてきた傾向があり，女子少年を主とした非行少年研究において，家庭の状況と性行動との関連が論じられている。たとえば，伊藤冨士江「性非行で補導された女子少年の性行動と性意識」『科学警察研究所報告：防犯少年編』第26巻第1号，1985年や伊藤冨士江「女子少年による性非行に関する研究」『科学警察研究所報告：防犯少年編』第28巻第1号，1987年があげられる。近年のものでは，宮原忍ほか「若年者の性についての行動と意識に関する研究：第3報　高校生の性行動と意識について」『日本子ども家庭総合研究所紀要』35，1999年がある。

15　鈴木佳代「前掲論文」(2003年) pp.43-47。

〈附記〉

本稿は，修士論文『若者の性行動意識』(未公刊) の一部をまとめたものである。この場をお借りして，アンケートにご協力いただいた高等学校の皆様，インタビューに応じてくださった高校生の方々に心より感謝の意を表したい。